僕の母は淫らな継母　～熟れた肉体の誘惑～

直輝／NAOKI

第一章

　僕の母は、継母だ。

　僕の実の母は僕が十二歳の時、癌で亡くなったのだが、その二年後、今の母が父と再婚して僕の元へやってきた。

　実の母は派手で華やかな人だった。綺麗で背が高くて、いつも高そうな服を着こなしていた。小学校の父母参観の時などは、他の生徒の地味な親たちの中でも光って見えたもので、それがとても誇らしかった。

　新しい継母も、若く優しかったが地味な人だった。それでも僕にとっては、その地味な優しさに癒されるようでありがたい存在だった。

　今年、僕は高校に入学した。

　彼女もいない、学校と家と往復するだけの生活。つまらない学校生活に刺激が欲しかった。

　ある日、僕は学校帰りに駅に向かっていた。

ふと目の前の美しい女性に目を奪われた。黒いストッキングに高いヒールを履いた、きゅっと締まった細い足首。高校生の僕が見てもなんともエロティックだった。

背の高い男にしなだれかかり腕をからませた女は、スタイルも良く、どんな身体があの服の下に隠されているのか、想像を抑えるのが難しかった。

そんなことを考えながらどきどきして僕が見ていると、前を歩いていた女が信号待ちで足を止めた。

僕もすぐ後ろに立ち止まった。女が組んでいた手をほどき、風で乱れたウェーブがかった長い髪をかき上げた。その手をそのまま男の肩にあてた。

（綺麗な指だな……）、

細くしなやかな長い指先は、キラキラと輝いていた。華やかなローズ色のマニキュアはラメがたくさん入っているようで煌めいていた。女は男の耳元に顔を寄せると何か囁いた。

（えっ！）

思わず僕は目を疑った。ちらりと見えた横顔に見覚えがあったからだ。

（お義母さん……？　まさか……）

目の前の女は、普段の義母とはまったく違う派手な化粧をしていた。

胸の鼓動は早くなっていった。

信号が変わり、人並みが動き始めた。そのまま女の後ろをついていく。

普段の母は髪を後ろでひとつにきっちりと結んでいるが、女は長い髪を風に揺らしている。

そうして歩いていると、二人は大通りから脇道へと曲がっていった。

思わずついていく。

さらに進んでいくと、またも細い路地へと入っていく。

（えっと、この先は……ホテル……）

当然のことながら二人の行き先はラブホテルのようだった。

足を止めようとした時、二人の姿は雑居ビルの狭い間へと消えていった。

二人が消えていった狭いビルの間を覗き込むと、暗がりの中、男の首に女の指先がからみついていた。女が男に抱きついたようだった。

しばらく抱き合っていた二人だったが、男が体の向きを変え右側のビルの壁に背をもたれかけた。

さらに激しく唇を合わせているようで男の手が、女のコートの上からウエストからヒップを撫で回しているのが見えた。

すると、女の手が首から外れ、徐々に男の体の下へと下りていった。

（うわ……まさか……）

しなやかな指先が踊りながら男の股間へとたどりつくと、ズボンの上からやんわりと揉み始めた。

ゆっくりと動く指がいやらしく、まるで自分のその部分を揉まれているようで、思わず股間が熱くなった。

女が指を動かしたまま、すっとその場にしゃがみこんだ。

（う、嘘だろ……）

指先がズボンのファスナーにかかると、女は顔を上げ男の顔を見てっと笑ったように見えた。

ファスナーを下げていくと、その間に指を滑り込ませ熱くたぎったモノを取り出すと、彼女は舐め始めた。

彼女の頭が激しく前後に動き始めた。その刺激に男は低い呻き声をあげた。手を伸ばし女の頭を掴む。

女は顔を動かしながら、時折唇を外し舌先で肉棒を舐めまわしながら、男の顔を見上げる。

僕は目の前の光景に興奮していた。股間は勃起して熱く疼いていた。

（こんなところで、すげえ……）

そう思いながらも、熱く張り切った股間のモノは先端から液を流し、下着を濡らしているのが自分でもわかっていた。

「あおっ！　もう、出そうだよ！」

男が腰を痙攣させた。継母の頭の動きが止まり、ペニスを口から離した。

「じゃあ、続きはホテルで……」

継母は男のペニスをズボンに戻してキスをした。二人は腕を組んで、ホテル街に姿を消した。

　翌朝、寝不足気味だった。

（あれは、お義母さんだったのだろうか？）

　朝に顔をあわせたとき、いつもの地味な継母だった。

　ぼうっとしたままその日一日が終わってしまった、

　学校帰り、コンビニに立ち寄ると、目の前に継母が通った。

　昨日のことを思い出し緊張したが、いつものように、薄いメイクにきちんと髪をまとめた、地味な雰囲気を漂わせていた。僕を見つけると、小さく微笑んで軽く手を振った。

「おかえり」

「ああ」

　言いかけて僕は言葉を失った。その指先は華やかなローズピンク色でキラキラときらめいている。

「……どうしたの？」

　驚いた表情をしている僕を不思議そうに見つめ、継母が言った。

「そ、それ、すごい色だね、父さんが見たらびっくりするよ、きっと」

（……本当にあの女はお継母さんだったんだ……あの、マニキュアの色……まちがいない……）

　突然、継母の顔色も変わった。

　挑発的に、僕を見つめる。

「この前、見たんでしょ？　ね、どこまで見てたの？」

「えっ？」

　思わず声が上ずった。継母にはすべてお見通しのようだった。

「あーん、その様子だと見てたんだ……全部。ねっ？」

　顔を近づけて囁いた。甘い香水の香りが鼻腔をくすぐる。

　姿形、性格まで別人のようだった。

「驚いたよ……まるで別人だよ」

「そうね。どっちが本当の私かしら？」

　可笑しそうにくすくすと笑っている。

「あ、あの人、誰？　彼氏？　父さんは知ってるの？」

「まさか！　彼だなんて、冗談じゃない」

　驚いたように目を見開いて言った。

「えっ、だって……」

「あの日、初めて会った人よ、声かけられて。食事してホテルに行く途中だったの」

「は、初めてって……そんなこと」

「びっくりした？　そんな女で」

　思わずごくりと生唾を飲み込んだ。僕の顔を見て微笑む継母はとても綺麗だった。

　普段のおとなしくて清楚な女の顔ではない、真っ直ぐな瞳で自分の欲望をさらけだす、淫

らな女の顔だった。

「父さんのこと、話さなくちゃいけないしね。私のこと秘密にしてくれる？」

　わけがわからない。でも、知りたかった。

　継母が僕を見ていた。

「いまからホテルへ行きましょう。そこで話してあげる」

　そう言って、驚く僕の顔を見て笑った。

　ホテルに継母と入る。緊張していて、どうやってエントランスをくぐったのか覚えていない。

「とりあえずシャワー浴びてきなさい。話はそれから……」

　僕は母に促されてバスルームに入った。ペニスが硬く勃起していてパンツを濡らしていた。

　俺はなんていやらしいんだ。継母といっても、一つ屋根の下で暮らしている母親に欲情しているなんて。

　シャワーを済ませた僕は、ベッドの上の継母を見て驚いてあっと声を上げた。

　深紅のブラとパンティを身にまとった継母がベッドに横になっていた。継母が僕を見て体を起こすと、豊かな乳房がぷるんと揺れ、ブラのカップから盛り上がった白い肉が誘うように艶かしく揺れて、僕の男の欲望を刺激した。

　継母は妖しく濡れた瞳を僕の下半身に向けた。僕ははっとして視線を股間に向けた。バスタオルをまいた前がみっともなく大きく膨らんでいた。

「ね、見せて」

「あっ！」

　腰に巻いたバスタオルを継母が手を伸ばして外してしまった。完全に勃起したペニスが飛び出して天井を向いた。

「うわ……すごいのね、もう、こんなに……」

　剥きだしになった肉棒は血管を浮き立たせ、隆々と天を仰いでいた。

　シャワーを浴びている時から、継母の艶かしい肢体を想像して肉棒は勃起したままだった。

「素敵……おいしそう……」

　きらめく指先が肉棒にそえられ、赤い唇から突き出た舌先が亀頭部分をそろり、と舐め上げた。

「ううっ……」

　すぐにそのまま継母の唇が被さり、肉棒を呑み込んでいった。疼くような快感が襲う。

　ちゅぱっ、ちゅぱっと音を立てながら肉棒を吸いたてる。

「んんっ、おいしいわ。とっても硬くて熱くて、いいわぁ。ね、ベッドに寝て」

　唇を外し、顔を上げて言った。瞳が濡れて光っている。

　強烈な快感に支配されていた僕は抵抗できなかった。言われたとおりにベッドへ仰向けになると、すぐに継母は足の間に膝をつき、本格的なフェラチオを始めた。

　前屈みになった胸元からこぼれ落ちそうに白い乳房が揺れる。

「うあっ……すごい……」

　肉棒を咥え、吸いたてる継母に僕は呻いた。

　上下に顔を動かし頬をすぼめて強く吸いたてながら、目を開けて僕を見つめる。

　見つめながらわざと舌を突き出し、根元から亀頭までゆっくりと舌を這わせ何度も舐め上げる。

「うっ、もう、ダメだっ、そんなにしたら出ちゃうっ」

「……いいのよ、出して……全部呑んであげる……」

　そう言うと継母はさらに激しく、じゅぷじゅぷと音を立てて強く吸いたてる。

「うっ、うっ、うああっ」

　腰を痙攣させなから、僕は継母の口の中に射精した。

　膨れ上がった肉棒の先端から放たれた精液を、継母はごく、ごくりと全て呑みくだした。

「ああ……おいしいわ。すごく濃くて。量もたっぷりね」

　荒い息を吐いている僕の上に継母が肌を重ねて耳元で囁いた。

「お継母さん……どうして？」

「だって、誠くん、私とえっちなことしたかったんでしょ？　だって、いつも私の履いていたショーツ、洗濯籠から持ち出しているじゃない？」

　そういって、継母はふふっと笑って僕にキスをした。僕は、耳まで真っ赤になった。

「ふふ、気づかれていないと思ってた？　いつもどうしているの？　私のショーツ」

　僕は恥ずかしさのあまり、その場で固まって動けなくなった。

「当ててあげようか？　匂いとか嗅いでるんでしょ？　匂いを嗅ぎなから自分で扱いているんでしょ？　そして、興奮してくると、オチンチンをショーツでくるんで、その上から扱いて私のショーツの中に出してたでしょ？」

　継母は僕の恥ずかしい行為のすべてを知っていた。

「わかってたのよ。でも、いいの。気にしないで。あなたくらいの男の子は皆そうなんだから」

「う、うん……」

　僕は観念してすべてを認めた。継母は妖しい視線で舐めるように僕を見ていた。

「じゃあ、私の秘密も教えてあげる」

「えっ？」

「私ね、あなたが使い終わった後の自分のショーツの匂いを嗅ぎながらオナニーしていたのよ。あなたの精液の匂いを嗅ぎながら」

　僕は驚いた。まさか継母が僕の欲望の淫汁の匂いを嗅ぎながら自分を慰めていたなんて。そんな事実を聞かされても想像できそうになかった。

「わたしね、誠くんのことが気になって、セックスしてみたくって仕方なかったの。でも、夫の子供に手を出すなんて出来ないでしょ？　だから、その欲望を紛らわせるために、街で男をあさっていたのよ」

　継母の瞳が濡れていた。時々 舌を出して自分の唇を舐めた。唾液でぼてっとした継母の

赤い唇が淫らに光る。

「でも、もう、そんなこと、する必要もなさそうね。うふっ。あなたとどんなセックスしようかしら」

　継母の唇が耳たぶを強く吸った。

「うあっ……」

　母の舌が耳の中をちろちろと動き回る。

「ふふっ、感じやすいのね」

　悩ましげにふふっと笑うと、唇を重ねてきた。

　甘い舌が侵入し、舌を絡めとり唾液を流し込んできた。

　僕は、継母を女として意識しだしていた。ずっと隠してきたのに。

　夢中で継母の唾液を呑み下し、舌を吸った。

　継母は、艶然と微笑みながら背中に回した手でブラのホックを外し、肩ヒモを落とすと赤いブラを脱ぎ去った。

　形の良い豊かな乳房がぷるんと飛び出す。淡い乳首はすでに硬く尖っているように見えた。

　手を伸ばし、乳房に触れようとするのを継母が阻止する。

「まあだ、ダメよ。」

　そう言って体を倒し、僕の胸に舌を這わせ始めた。

「ううっ」

　舌先が乳首の周りを這い回り、尖らせた舌先で乳首を強く弾いた。

「ねえ、誠くんって、まだ童貞でしょ？」

　僕は黙って頷いて。

「女のアソコって見たことないんでしょ？　見せてあげる」

　そう言って、継母は僕の目の前でパンティを脱ぐと、僕の前に座って脚を広げた。

「ねえ、見て。女のここって、こうなっているのよ」

　僕は胸をどきどきさせながら継母の股間を凝視した。継母が濡れそぼった肉びらを指で左右に大きく拡げた。

　にちゃっという音がして、継母の秘唇がいやらしくぱっくりと口を開けた。

「ねえ、すごいでしょ。舐めてみる？」

　そういって、継母は指で広げた赤い膣を僕の目の前に持ってきた。

　僕は、その赤い肉の割れ目へと、思いきり尖らせた舌先をねじこんだ。甘酸っぱい香りとともに、とろりとした愛液が口の中へ流れ込んでくる。

　それをじゅるるっと音を立てて吸い込み、飲み下す。

「ああっ、おいしいよ……お義母さん……」

　呻きながら、さらに鼻先を尻の割れ目へと押し付け、ねじこんだ舌先で熱い潤みを掻き回し、じゅるじゅると音を立てながら愛液を啜る。

「ああん……いい、いいわぁ。もっと吸ってぇ……　もっと私のいやらしいところを見て……」

　継母は握った肉棒を指でしごきながら、硬い先端を口に含み、中心の小さな穴へと尖らせた舌先でほじるようにちろちろと嬲っている。

「うふん……すごいわ、こんなに大きく硬くなって……」

　そう言うと、先端に被せた唇を一気に根元まで深々と咥え込み、じゅぷっじゅぷっと音を立てて顔を上下させ始めた。

「ううっ……」

　激しい吸引に負けまいと、濡れた左右の肉びらを激しく吸った。

　秘所を押し付けるようにぐいぐいと振り立ててきた。

　部屋の中はお互いの淫靡な部分を貪り合う音が続いている。

「ああっ、もう、欲しいわ……この硬いのが欲しいの……」

　肉棒を咥えていた唇を離すと、我慢できなくなった継母は体を起こした。

「ね、はやく。来てごらん。ここよ」

　継母は足を広げ、性器を露わにして僕の手を引っ張った。

　僕も（いよいよか……）と決心して狙いを定めて身体を重ねた。でも、位置を確かめたはずなのに、なかなか挿入できない。

　「うふっ、ここよ」

　継母はそのまま体の向きを変えると、優しく僕の勃起に手を添えて屹立した肉棒を跨ぎ愛液と唾液でぐちょぐちょになった秘唇をあてがった。

「じゃあ、あなたの初めて、もらうわね」

　脈打つ太い肉棒が赤い肉びらを割り、ゆっくりと継母の膣奥へと、ずぷりと突き立てられていった。

「うっ、うああっ……」

「はあっ、あううっ……」

　二人は同時に声を上げた。

「す、すごいっ……熱くて硬くて……いいっ、いいわぁ……」

　ずっぽりと根元まで埋め込まれると、継母が恍惚の表情で喘いだ。

　その肉棒を離すまいと、尻を前後に振り、豊かな乳房を揺らしながら体を躍らせた。

「うっ、いいっ……し、締まるっ……」

「気持ちいいでしょ？　これがセックスよ」

　継母の熱い潤みの中でやんわりと締め付ける窮屈な感覚に刺激され、堪らず呻いた。

　二人の繋がっている部分は、継母の溢れ出す愛液で互いの太ももから尻までぐちょぐちょに濡れ、さらにシーツをじっとりと濡らすほどだった。

　ずちゃっずちゃっと音を立てながら揺れる腰を、両手がしっかりと掴み、さらに下から激しく突き上げると体が後ろへとのけぞりしなった。

「ああっ、いいっいいっ……気持ちいいっ」

　上下にぷるんぷるんと激しく揺れる乳房に手を伸ばし、硬く尖った乳首を摘み上げると、

継母は高い声を放った。

　白い肌は上気し、ピンク色に染まっている。

「最高だよ……お義母さん、ぐいぐい締め付けてきて堪らないよ……　もう、出そうだよ……」

「あん……あたしも、もうイキそう……ね、激しく突いてっ」

　継母はシーツに乳房を押し付け腹ばいになると、張りのある尻を高く掲げた。

　尻から腿の裏側は愛液で濡れててらてらと光り、妖しい女の匂いを放っていた。今まで太い肉棒が埋め込まれていた秘唇はぱっくりと口を開けたまま、再び逞しい肉棒の挿入を待ち焦がれているようだった。

　その赤い肉襞はたっぷりと愛液を滴らせ、さらに奥からは透明ないやらしい蜜が美味しそうに溢れ出ていた。

　目の前の尻肉を左右にぐいと拡げ、そこに顔を埋めると愛液をじゅるじゅると吸い取った。

「ああんっ、早くうっ、奥まで突っ込んでっ」

　なんていやらしい女なんだと思った。

　僕は両手でしっかりと尻肉を掴むと、かちこちの肉棒を一気に膣奥へと突き入れる。

「ああーっ！」

　継母は、高い声を上げた。

　熱い潤みとぎちぎちの肉襞が一斉に肉棒を刺激してきた。

「す、すごいのぉ……いいっ」

　激しく腰を振り、肉棒を膣内にこすりつけ掻き回す。

「うあっ、すごいっ……締まる、締まるよ……もう、出、出るっ！」

「あ、あたしも、イッちゃうっ……！」

　ぶちゅっ、ぐちゅっという湿った音と、ぱんぱんっと肉のぶつかりあう音がさらに激しくなった。

「出る出るっ、うああーっ！」

「いいっ、いく、いくう、いいーっ！」

　継母の悲鳴が上がった。

　二人の荒い息と火照った体が重なり合う。

　ひくひくと痙攣する継母の膣奥からずにゅりと肉棒を引き抜くと、大量の白濁液がごぽり、と赤い肉びらのはざ間から溢れ、内腿からシーツへとつたわり滴り落ちていった。

「すごく気持ちよかったわ。誠くんって、えっちの才能あるかも」

　そう言って、継母は手を伸ばして、萎みかけたペニスに触れた。

「それに、すごく大きいし……。ふふふ……。こんな立派なものを持っていて今まで童貞だっただなんて、もったいないわ。これからうんと使わなきゃ。でも、お義母さん以外には使ってはだめよ」

　そういって、淫汁で光っているペニスを口に含んだ。

「うう……」

　生暖かい粘膜に包まれて、精を放ったばかりの男根に再び力が漲り始めた。

「うふ、もう大きくなったわ。若いっていいわねぇ」

　継母は僕の勃起したペニスを撫でて、吐息をもらした。僕は恥ずかしさのあまりに頬を赤らめてしまう。

「また挿れたいんでしょ？　いいわよ」

　そういいながら、継母は、自分の右手を自分の股間にあてがう。

「見て、私のオマンコ、ビショビショ」

　継母は自分の陰部に手を伸ばし、手でその淫らに濡れた割れ目をを拡げた。その瞬間、彼女の膣の中に溜まっていた精液と愛液がトロリと溢れ出す。

「あんっ」

　彼女は思わず声を上げてしまう。継母の露な姿態や淫らな恥部が眼に入り、恥ずかしさのあまり眼を背けてしまう。

「ダメだ。眼を逸らしちゃ。お義母さんのいやらしいオマンコをしっかり見るのよ」

　僕はドキドキしながら継母を見た。下腹部を突き出すような体勢で、女性の恥ずかしい部分を両手で広げ曝け出した。恥ずかしい蜜はあふれ出すことを止めない。その淫らなポーズに、僕は昂奮のあまりに気を失ってしまいそうだった。

　僕は既に臨戦態勢だ。部屋の姿見をみれば、まさに継母の股間に、僕の逸物が写しだされている。

「さあ、欲しくて仕方なかったんでしょ？　また入れてもいいのよ……」

　そういって、継母はその白い華奢な手を僕のペニスにあてがった。

　継母は、手のひらで僕のペニスの固さや、その脈打つ様子を感じ取ってうっとりとしていた。

「あ……。今、子宮の奥がキュンとしたわ。私の子宮が欲しがっているんだわ……」

　そして、継母は、ゆっくりと自分の膣に僕の固い物を近づけていく。

「あああ……オチンチンの先で、オマンコを擦って……」

　僕は命じられるままに、ペニスを握って、継母のピンク色の花びらに触れさせる。猛り狂ったペニスに継母の体温が粘膜を通して伝わってきた。

　僕は自分の手でペニスを軽くしごきながら、上下させると、継母の膣の入り口を擦り上げる形になり、その刺激だけで、継母は達しそうになってしまいそうだった。

　継母の表情は快感に堪えているようであり、瞳は固く閉ざされている。なまじ彼女が童顔なだけに、それは不思議な卑猥さを醸し出している。

　そして、僕は、その一部始終を姿見を通して眺めながら、少女の手のひらの感触を楽しんでいた。

「どう？　お義母さん、鏡に映っている自分の姿が見える？　自分のオマンコにおちんちんを擦り付けられているよ。どう思う？」

　僕は、継母の耳元でイジワルな質問を囁く。

「いやん、恥ずかしい」

　継母は、頬を赤らめながら僕の質問に答える。まだまだ羞恥心は残っているようだ。だが、

小さく腰まで使い始めている。このままでは挿入する前に果ててしまいそうだ。

　僕は、手を自分のペニスから放すと、まるで、幼女をおまるにおしっこさせるときのように、継母の太股を抱きかかえ自分の膝の上にのせた。ちょうど、継母の股間から僕のペニスが生えたような不思議な光景になっている。鏡には巨乳が映し出された。

「ねえ、この体勢で腰を振ってよ。オチンチンにオマンコを擦りつけるように」

　継母の露わになった乳首を両手でいたぶりながら、僕は彼女に頼んだ。

「うふ、いいわ」

　継母は不自由な体勢にも関わらず腰を振りはじめる。

「あ、あんっ、あん」

　固いペニスが、自分の秘部を擦り上げる感触と、乳首への刺激に継母は声を上げてよがった。たまに、その動きの変化によっては、充血しきった敏感なクリトリスをも擦り上げる。その度に、継母の喘ぎ声は、大きく、激しくなる。

　しかし、いくら腰を振っても、不自由な体勢でペニスをヴァギナに擦り付けるだけでは、もう彼女を満足させるだけの快感は得られなくなっていた。

　そして、そのことは、僕も十分に感じ取っていた。

「ああ……、おちんちんが欲しくてしょうがないわ」

　もはや継母は快楽の虜になっていた。僕は乳首への刺激を止め、両手で彼女の腰の動きを止めた。

「ほ、欲しいの。このスケベなオマンコに太くて固いおちんちんが欲しいの」

　継母は、股間から生えている僕のペニスを握り、腰を浮かせた。そして、自分のヴァギナにその固い物をあてがう。

　継母は、ペニスをあてがった状態で、一回大きな深呼吸をした。性の快感に馴れきった熟女ならではの、逡巡だったのだろう。もう、彼女に自分の欲望を止めることはできるはずもなかった。

　じっとりと熟れた、十分に魅力的なヒップを、彼女は、ゆっくりと降ろし始めた。濡れそぼった秘部に亀頭がめり込む。

「はあんっ」

　堪えきれずに継母は声を上げた。

「お義母さん……」

　僕は両手で継母の乳房を支えながら揉みだした。

「腰を使ってあげるわ……」

　継母は腰をくねらせ、膣の内壁で僕の勃起を扱いた。そして、得もいえぬ女の快感に浸っていた。

　キュキュキュ……

　継母の腰使いが激しくなるたびベッドのきしむ音がホテルの部屋に響いた。

「お義母さん、気持ちいいよ……」

ヌチャ、ヌチャ、ヌチャっと、卑猥な音が結合部から聞こえてくる。

「ああー……いいわ、誠くん……」

しばらく、僕はこの体位で酔った。継母が腰を激しく振るたびに、目の前の継母の豊満な乳房がゆさゆさ大きく揺れていた。いました。

「今度はバックから……お願い……」

継母はとろんとした目を僕に向けると、腰を上げてゆっくりペニスを股間から抜いて、四つん這いになった。突き出された魅惑の白い尻の割れ目には綺麗なアナルがひくついていて、その下にぐっしょり濡れた膣がパックリと口を開けて淫らにその中身を晒していた。

「本当にエロイよ、お義母さん」

僕はそう言いながら背後からお尻を抱えた。

僕は腰を押し出し、ズズズっとペニスを挿入した。

「あああっ！　凄いわ！」

「そら、どう？」

「うう……あああ……だめ、そんなに……ああ……誠くんの……大きい……」

「だ、大丈夫？」

「平気よ……うれしいわ……」

僕は腰をゆっくりと上下に動かした。

「はぁ……ん……んあ……な、何これ……引きつっちゃう」

　僕はゆっくり腰を迫り出した。めりめりと音を立てているように錯覚するほど、継母の中はきつかった。甘い快感が体に広がり、カラダ全体がペニスになってしまったように感じていた。

「誠くん……は……ふぅ……あぁ……そうよ……そのまま……」

　膣の中の蠢きがペニス全体に行き渡った。ぬめりと肉襞の凹凸が、僕にはこの世のモノとは思えない極上の快感をもたらしていた。そのひとつひとつを味わう余裕などとてもなく、ひたすらに送られてくる快楽に身を任せた。

「あ……うぅ……ん……す、すごいよ、誠くんの……」

「お義母……さん……このままじゃ、でちゃいそう……」

　僕は快感に体をくねらせ、腰をすりあげた。

「待って……一緒に……ね、我慢して……」

「で、でも……」

「大丈夫……わ、私もすぐ……イキそう……だから」

　僕は体を反らすようにして継母の尻肉を掴み、激しく腰を振った。

「あああああっ！　気持ちいい！」

　腰をぐっと引くと、継母を満たしていたペニスが姿を現す。継母は身悶えた。半分くらいまで見えたところでまたそれを埋めていく。力を抜きすぎるとぐちゅっと淫らな音を立て、脳まで突かれるような刺激が襲ってきた。

「いやぁ……ん、んあ！　あっああ～」

「お義母さん……き、気持ち良い……」

「あン……んんっ……誠くんの……奥に当たって……気が遠くなっちゃいそう……はぁっ、んっ……」

　継母のカラダが激しく反応して、中に収まっている僕を握るようにきゅんと締め付けた。二度放った僕もこれには耐えられなかった。

「も、もぅ……ダメだ……気持ちいい……うぉっ……ぁうう……出る……っつうぁぁ！」

　先に限界を迎えた僕は、その最後に身体を反らして鋭く天を突いた。そして継母の奥にびゅるびゅると熱い精液を注ぎ込んだ。

「ああ……ぃやっ……いっ……いくぅ……んぁ……あああああっ！」

　カラダの奥に濃い精液を打ち注がれ、継母も深く絶頂を迎えた。僕の吐精が終わるとぐにゃりと前に倒れこみ、そのまま動かなくなった。

（体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願いいたします。）